

六月例会発表要旨

特集

虚構の〈国家〉

——現代文学の闘争と批評性

【特集の趣旨】

運営委員会

これまで文学が創造してきた虚構の〈国家〉は、言語や国境の問題、中央と地方、ジェンダー構造、科学と産業など、現実の国家の内部に隠避された亀裂や揺らぎをさらけ出す役割を果たしてきた。特に、敗戦、原爆、震災など、それまでの共同体のあり方を大きく揺さぶるような出来事によって新たな想像力を掻き立てられた現代小説は、現実の国家が提示する国家像の虚構性をあぶり出していったといえよう。

戦後文学とそれを継承する現代文学は、「満

州国」をはじめとした、まさに国家が捏造した幻想の国家と大東亜共栄圏という虚構の思想に対峙するところから始まった。たとえば、「無国籍作家」といわれる安部公房の思想には、戦時共同体からの脱出と新たな共同体への夢想が読み取れる。あるいは、「日本・日本人」の境界を引く、排除と包摂のプロセスに刻まれた国家をめぐる暴力性は、沖縄文学や在日朝鮮人文学などによって可視化された。

高度経済成長期のひとつの指標である一九六四年の東京オリンピックと同年に、井上ひさしは、『吉里吉里人』の原型を書き、東北の「独立」を夢想した。ここで見られる、中央と地方の不均衡な関係性を転覆させるような想像力は、半世紀後の東日本大震災を経て、二〇二〇年の東京オリンピックに向けて

再燃し始めた、国民国家の再強化への欲望に對しても有効だと考えられる。そのほか、現代文学の作家たちの試みとして、吉村萬世『ポラード病』や多和田葉子『献灯使』、笹野頼子『ひょうすべの国』など、震災後の近未来社会や閉ざされた共同体を描くことで現実の国家のあり方を内部から問い直すような小説も少なくない。

本企画では、以上のような、現実の国家という枠組みを相対化しうる代案的共同体（ないしは視座）を総称して「虚構の〈国家〉」と題し、その共同体の越境性を、現代文学の有する批評性から問う場としたい。ゲストとして、カリブ海文学のクレオール性を研究し、移動や越境について思索を深めておられる小野正嗣氏をお招きし、ご講演いただく予定である。

安部公房『榎本武揚』と 「明治ブーム」

坂 堅 太

安部公房『榎本武揚』は『中央公論』一九六四年一月号より翌年三月号まで計三回連載され、同年七月に中央公論社より刊行された。この小説を駆動させているのは、元憲兵という過去のために戦後社会から白眼視されている男の、「変節漢」・榎本武揚に対する執拗な関心である。敗戦と明治維新という、二つの歴史的な価値転換期における「忠誠」のあり方を問うたこの小説は、「転向者・榎本武揚のマキアヴェリズムを通して政治の世界の苛酷さと、心情倫理の虚妄を浮き上がらせている」（磯田光一）、「現代の転向問題を扱った、新しい型の転向文学だ」（武井昭夫）というように、転向問題と結び付けて論じられることが多い。作品発表の二年前、安部が日本共産党より除名処分を受けていたことを考えると、そうした読みにも一定の妥当性は認めざるを得ない。

ただ、今回の発表では、もう一つの文脈として

「明治ブーム」（竹内好）との関係にスポットを当ててみたい。明治維新百年が近づきつつあったこの時期、論壇では明治を再評価する機運が高まりを見せていた。特に『中央公論』は一九六二年に「明治維新の再評価」という特集を一年間連載するなど、この流れをいち早く作り出した雑誌であり、さらに六三年からは林房雄「大東亜戦争肯定論」の連載を始めている。『榎本武揚』もまた、こうした「明治ブーム」の一部を構成するものであり、「明治」を語る様々な言説との関係の中で読まれていたことは間違いない。作者である安部にとっても、そうした文脈は常に意識の中にあっただけである。

では、『榎本武揚』と同時代言説の間にはどのような照応関係を見ることが出来るのか。佐幕／勤皇という二つの「忠誠」を越え、「共和国」という「第三の道」を模索する存在として提示された榎本像は、ナシヨナリズムが色濃く反映されていた「明治ブーム」の中でどのような位置を占めるものであったのか。本発表ではこうした問題について、一九六七年の戯曲化の問題についても視野に

入れながら考えてみたい。

「Ｑムラ」という空間

—— 崎山多美『うんじゅが、ナサキ』をめぐって

村 上 陽 子

崎山多美は、誰か（あるいは何か）に呼びかけられ、その呼びかけに答えるかどうかを決める間もなく出来事に巻き込まれる主人公をこれまで繰り返し描いてきた。『うんじゅが、ナサキ』（花書院、二〇一六年）の主人公「わたし」もまた、差し出し人不明のファイルが届けられたことよって仕事中の自室から引きずり出され、自らの足でシマを歩き回ることになる。ファイルの記述に導かれ、わけがわからぬままに得体の知れぬ人々と出会い、ともに行為する「わたし」を介して交錯することのなかった時間や場所が結びつき、新たな世界が開かれては閉じていく。「わたし」が迷い込む世界の一つに「Ｑムラ」がある。「謎」を意味する「Ｑ」を冠するこ

のムラは、歴史の表舞台で起こる出来事に合意しない人々が地下を掘って作った人工のムラであり、「テキから身を守る保護区」でもあった。すでに滅んで久しく、人々から忘れ去られたその空間には、住人たちが遺した記録や思念、「テキ」と闘うための「特別なクンレン」のメソッドなどが残されており、「わたし」はそれらと向き合っていくことを求められる。

本発表では、歴史の表舞台を支配する「テキ」に武力とは異なる方法で闘いを挑もうとした「Ｑムラ」の未発の闘争に着目すると同時に、「Ｑムラ」が「わたし」という存在を飲み込んで初めて息づきはじめる空間であることの意味を考察する予定である。生身の「わたし」が跳梁することで「Ｑムラ」が過去の遺跡ではなく、現代に息づく空間として現れなおしているのだとすれば、そして「Ｑムラ」を生きた人々が「わたし」という存在によって呼び起こされているのだとすれば、そこにはたとえ「テキ」に潰されようとも、声を聴き、記録を読み、行為しようとする者がいる限り、その都度結び直される共同性のあり方を見出すことができるのではないか。崎山多

美のテクストから、そのような可能性を読み取っていくことを試みたい。

国家はだれのものか

—— 災禍のなかの文学的想像力

中川 成美

後期資本主義下におけるグローバリズムは、国家の枠組みを超えた経済活動と政策を推し進め、多国籍企業や巨大なIT産業の出現による社会現象の変化は、もはや押しとどめることは出来ない。そう言いながらも一方に耐久力にだいがびの入った国民国家に縋り付こうというバックラッシュも急速に高まって、民族主義や排他主義の跋扈を招いている。

二〇世紀後半から論議される国民国家批判は、次のステップへの模索として捉えられるが、もし国民国家に何らかの美質があるとすれば、それは「国民」の命を国家は保全し、守ってくれるという一点に集約されるであろう。原則的には国家は国民を守り、国民

は国家に義務を果たすという約束を相互に結んでいるのだ。

だが、戦争や災禍の度に、国民は裏切られた。その経験によって感知された国家への懐疑こそが、新たな文学的想像力の磁場となったのだ。二〇一一年三月一日の東日本大震災を契機として巻き起こった文学的環境の変化を手掛かりに、文学にしか持ちえない力を本発表では考えたい。

三・一一と、今よばれるこの未曾有の災禍は、まさしく国民的な経験であり、国家的な悲惨であった。だが、当初海外からも称賛された忍耐に満ちた受苦のあり方が、やがて日本政府によって略取され、現実には被害を受けた人々への保護を曖昧にしていたことは、この七年間の経緯で明らかである。わずか七年で、「風化」などという言葉が行き交い、真の解決に向けた努力は、政策的にも心理的にも前進はしていない。多和田葉子は震災後すぐに『不死の鳥』（二〇一一）を執筆し、やがて『献灯使』（二〇一四）を書いた。津島佑子はその絶筆となった『半滅期を祝って』（二〇一六）で、狂的なファシズムに傾斜していく三〇年後の「二ホン」を描き、笹野頼

子は『ひょうすべの国』(二〇一六)でそのように迷走する日本の現実が、どのような因果をもって転回しているかを切り取った。

これらの作品を想像上のSFや近未来小説、あるいはパロディーや風刺小説とみなすことは簡単である。だが、これらが「現実」そのものを切り取っているとした時、文学的想像力は災禍の真の受難者を見出した。虚構である「文学」はこの時反転して、「国家」そのものの虚構性を鋭く追求するのである。現代文学の果敢な挑戦のあり方について考えたい。

講演 題目未定

小野 正嗣

【略歴】

小野正嗣(おの・まさつぐ)一九七〇年、大分生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学、パリ第八大学博士号取得。現在、立教大学文学部教授。専攻はカリブ海及びアフリカ作家のフランス語表現の研究。

『ヒューマニティーズ 文学』を二〇二二年刊行。小説家として、二〇〇一年「水に埋もれる墓」で第一二回朝日新人文学賞受賞、二〇〇二年、「にぎやかな湾に背負われた船」で第一五回三島由紀夫賞受賞、二〇一三年、「獅子渡り鼻」で第三五回野間文芸新人賞候補となる。二〇一五年には、「九年前の祈り」で第一五二回芥川龍之介賞を受賞した。